佳作

だけどやっぱりかわいい弟

鹿児島県　鹿児島市立広木小学校三年　大迫　凛

「思い出すなあ。あのころのこと。」

わたしが生まれてこれまでの八年間。うれしいことがたくさんありました。その中でも、一番うれしかった出来事は、弟ができたことです。赤ちゃんだった弟は、もう六才。四月に一年生になりました。あばれんぼうでわがままばかり言いますが、心はとってもやさしい男の子だということを、わたしはだれよりも知っています。わたしは、わたしの弟、れんのことが大すきです。

お母さんのスマホでしゃしんを見せてもらっていると、生まれたばかりの弟をだっこして、ほっぺたに顔をぴったりくっつけているわたしを見つけました。まだ二才の小さいわたしです。

「れんが生まれる前のりんはね、お母さんの大きなおなかに毎日話しかけてたんだよ。」

お母さんが、やさしい声で話しはじめました。話しかけるだけではなく、まだ生まれてもいないのに、まるでもう四人かぞくのように、

「これはれんくんの分ね。」

と言っておかしを分けて食べることもあったそうです。また小さかったころのわたしが、弟が生まれることを楽しみにしていたのです。

生まれてからの弟はとってもあまえんぼうで、もう一年生なのにソファーからお母さんのせ中にとびかかっておんぶをしてもらっています。まるで、動物園にいるコアラを見ているみたいです。わたしは、弟のかわいいところを見つけてばかりいます。たくさんあるかわいいところの中でも、お母さんにあまえている所が弟の一番かわいいところかもしれません。

けれど、たまにちょっとしたことでけんかをしてしまうことがあります。そして、弟ばかりお父さんやお母さんにあまえてずるいなあと思ってしまうこともあります。弟が生まれるまでは、お父さんやお母さん、おもちゃも何もかもがわたしだけのものだったのに、今ではそれがぜんぶ弟だけのものになってしまったような気がしてしまうのです。そんな時は、少しいじわるをしてしまいたくなります。とってもとっても大すきなのにな。

でも、わたしはやっぱり弟がかわいいです。小さな小さな弟を大事そうにだっこしている小さなわたしのしゃしん。そのしゃしんをうれしそうに見ているお父さんやお母さん。弟が生まれたことは、大切な人がふえたということなのです。あまえんぼうでわがままな弟。わたしがにが手な虫をたいじしてくれる弟。世界にたった一人しかいない、わたしの大事な大事な弟。わたしだけのかわいい弟。これからも、かわいいところをいっぱい見つけるね。たくさん遊んで、もっともっとなかよくしようね。いっしょにお絵かきをしたり、知らないことを見たりして、どんどん大きくなろうね。れんが生まれて来てくれたから、お姉ちゃんになれたんだ。れん、ありがとう。